

アトピー性皮膚炎治療の新展開

Advances in treatment of atopic dermatitis

菅谷 誠

Makoto Sugaya

国際医療福祉大学皮膚科学教授

Summary

アトピー性皮膚炎は増悪・寛解を繰り返す、そう痒のある湿疹を主病変とする疾患である。最近になって病態の理解が進み、発症に重要な分子をターゲットにした治療が開発されてきた。IL-4/13受容体、IL-31、IL-12/23p40に対する抗体やJAK阻害薬、転写因子に対するデコイ軟膏などである。また以前から使用されていた抗ヒスタミン薬も、新規薬剤が本邦で使用できるようになり、プロアクティブ療法の普及への新しい展開もみられている。悪化因子の検索、ステロイドとタクロリムス軟膏の外用、保湿薬によるスキンケアといった標準治療を基本としつつ、難治例に対してはこれらの治療が有用な選択肢となろう。

Key words

ビラスチン、デスロラタジン、dupilumab, nemolizumab, JAK 阻害薬, デコイ軟膏, プロアクティブ療法

はじめに

アトピー性皮膚炎(atopic dermatitis: AD)の日本での有症率は、30歳代までは10~15%であり¹⁾、決して珍しい疾患ではない。①ステロイド外用薬、タクロリムス軟膏などの抗炎症薬を中心とした外用療法、②悪化因子の検索や入浴の仕方などの生活指導、③保湿薬によるスキンケア、の3本柱が治療の基本であり、多くの症例は寛解導入が可能である。しかし一部の重症患者では、これらの一般的治療のみでは難治なことがある。最近になってADの病態解明が進み、発症に重要な分子をターゲットにした治療が開発されてきた。また以前から使用されていた抗ヒスタミン薬も、新規薬剤が本邦で使用できるようになり、プロアクティブ療法の普及への新しい展開もみられている。本稿ではこれらのAD治療の新展開について解説する。

I 新しい抗ヒスタミン薬

1. ビラスチン(ピラノア®)

欧州を中心に2010年から発売されている薬剤で、本邦では2016年11月より処方可能となってい